

巻 頭 言

「脳コワさん」と学会

福田正人 日本精神神経学会理事
Masato Fukuda

『脳が壊れた』と『脳は回復する』は、2015年の新潮ドキュメント賞候補となった文筆家である鈴木大介氏が、41歳で体験した右側頭葉の脳梗塞による高次脳機能障害とその回復の体験を記録した、一般向けの新書である。注意障害や左半側空間無視や感情失禁という症状を当事者がどう感じるかについて、教えられることが多い。

両書には高次脳機能障害に特徴的な症状だけでなく、意欲低下や離人感やパニックのような、さまざまな精神疾患に共通する症状にも注目し、それがどう実感され、どのような心理メカニズムで、どういう工夫で代償や回復につなげることができるかが描かれている。その工夫は、発達障害とその二次障害に加えて右前頭葉の膠芽腫を患った妻との18年間の生活から、自身の高次脳機能障害と妻の発達障害に共通点が多いことに気づいた経験に根差している。

精神疾患には、個別の疾患ごとの特徴と精神疾患一般に共通する特徴が重層している。この共通点は、「精神疾患とは何か？」という基本問題への示唆でもある。そうした疾患横断的な視点の重要性が、遺伝子や脳画像についての最新の研究から実証的に明らかになり、診断基準についてはディメンション分類が、研究開発においては脳機能にもとづく戦略が提唱され、精神疾患概念が大きく変わろうとしている。生活に根ざした当事者の素直な観察は、そうした精神医学の最先端を先取りしている。

* * *

夫妻の体験をそのように振り返ることができたのは、子どもや女性や若者の貧困をテーマに取材を続け、「一番困っている人たちは見えないところにいる」「本当は苦しいのに、自分で自分が苦しいことを理解できない」「苦しさや貧しさを、誤った方法で自己解決してしまっている」という観方に至った、ルポライターとしての著者の経歴による。そうした疾患非特異的な病状について、支援の仕組みが社会にないばかりか、精神科医の関心や認識が乏しく、それを表現する専門用語さえないことを指摘している。

「面倒くさくわかりづらく支援から最も遠いところにいる社会的困窮者」という言葉は、精神疾患患者が置かれる社会的困難の本質を示す。そうした困難についての夫妻の相互ピアサポートを描いたのが、『されど愛しきお妻様』である。そこには、「なぜお妻様を治療しないのか」という、精神医療についての根本的な問題の提起もある。

その妻が、精神疾患一般に共通する脳機能の特徴と社会的な困難を表現したのが、「脳コワさん」という言葉である。当事者や周囲が受け入れやすい癒しの表現は、アンチスティグマの巧みな取り組みでもある。

* * *

「学会があるなんて知らなかった、学会は自分たちに何をしてくれるのですか？」別の学会について当事者からそう問われたことがある。

日本精神神経学会は、「精神医学と神経学の研究を進め、(略)学術、文化の発展に寄与する」(定款)という学術的な目的のもと、「精神保健・医療・福祉の質的向上に貢献」(学会基本理念)することを使命とする、「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与する」公益社団法人である。法により定められた学会員への貢献を通じて、「人びとが平和で幸せな生活を送れるように支える」(倫理綱領)ことが求められる。

その実現のためには、当事者や家族や支援者の体験に耳を傾け、取り組みの知恵に学び、互いに手を携える関係を築くことが欠かせない。「脳コワさん」は、それが社会的で倫理的な要請であるだけでなく、学術団体にとっての科学的な課題でもあることを示している。当事者や家族や支援者と対等なパートナーシップを築き、互いの「できること」を見つけ(精神医学, 58; 458, 2016)、専門職としての「特権」を発揮する(精神誌, 117; 353, 2015)。そうした取り組みが学問の基本であると位置づけることが、これからの倫理綱領である。そのように発展する学会の姿こそが、当事者が学会に向けた問いへの回答になるだろう。